

論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	野田 智子
題名	長崎県雲仙市南串山方言の多様性 — 名詞アクセントと長音化の観点から —		
<p>本論文は、名詞アクセントと長音化の観点から、長崎県雲仙市南串山方言の多様性を記述するものである。</p> <p>長崎県の島原半島内の方言差は非常に大きい。島原方言は大きく南北に分かれ、半島内には 6 つの言語の島（周囲との言語差が著しい地域）がある。島原半島の西南に位置する雲仙市南串山町も「田之平」という言語の島を擁する。南串山町民自身も、町内の著しい言語差を認めている。島原半島南部では、17 世紀の島原・天草一揆後に他藩からの強制移住がなされたが、移住元と移住先の具体的な場所はあまりわかっていない。南串山町内にも国崎半島などに小豆島からの集団移住があったといわれるが史実は不明である。</p> <p>愛宕（1984）は、南串山町内に移住元の言語が残存する可能性を念頭に、国崎半島および隣接の地域までを言語の島とみなし、それ以外の地域との 2 地点を対照した。アクセントでは約 80% が共通したが、差異がみられた項目の 1 つを、語末の長音記号「ー」の有無として示した。また、愛宕（1984）は南串山方言のアクセント体系は示さなかった。</p> <p>そこで筆者は、南串山方言のアクセント体系の把握、愛宕（1984）でみられた長音記号「ー」の内容と詳細、その他、南串山方言の多様な言語差異の事実の把握を目的として本研究を行った。</p> <p>愛宕（1984）のほか、長崎（県下）方言のアクセントおよび長音化に関する先行研究を概観し、南串山方言はその位置から西南部九州二型アクセント長崎タイプであると想定されること、その音調は二型を A 型と B 型に区別するとすれば、A 型は発話の前方に最も高くなる拍を持ち、その直後が下降するもの、B 型は発話の末尾の拍が高いものであることを把握した。また長音化に関しては、島原半島全域で語中や語末にみられる下降や非下降のさまざまな長音化の報告があるが、その詳細は各先行研究によっても統一性がみられず、よくわかっていないことを把握した。</p> <p>本調査は 2021 年 5 月から 2022 年 12 月までの間に断続的に行った。内容は、1～3 拍名詞を単語単独と、助詞「モ」と「見える」を後接した助詞付き文の 1 回ずつの発話を録音し分析するというものである。調査対象者は愛宕（1984）の 2 地点を含め、南串山方言を話す高齢世代を中心とした 10 人あまりとした。</p>			

氏名	野田 智子
<p>以下、本調査の結果を、アクセントと長音化の 2 つの観点から分析して示す。アクセントのピッチの表記は高い音を H、低い音を L とした。その判断は概ね筆者の聴覚によって行い、判断が難しいものは音声分析ソフトウェアによった。</p> <p>まず、南串山方言のアクセント体系は先行研究の指摘どおり西南部九州二型アクセント長崎タイプであった。そのピッチパターンは助詞付き文で、1 拍名詞の A 型が HL、B 型が LH となる。2 拍名詞の A 型は HHL と LHL の 2 通りがみられ、B 型は LLH であった。3 拍名詞の A 型は LHLL に集約され、B 型は LLLH であった。2 拍名詞の A 型では、HHL 多用と LHL 多用で地域差があった。類別語彙の二型への対応は、1 拍名詞の A 型は 1・2 類で B 型は 3 類、2 拍名詞の A 型は 1・2 類で B 型は 3・4・5 類、3 拍名詞の A 型は 1・2・3 類で B 型は 4・5・6・7 類となり、これも先行研究と一致した。</p> <p>次に、長音化の観点から本調査の結果を述べると、南串山方言では大別して 3 種類の長音化がみられた。下降を伴う語末母音長音化、最小語制約による長音化、代償延長による長音化である。下降を伴う語末母音長音化はアクセントの型の実現に関与し、単語単独発話でのみ生起するものであった。愛宕 (1984) が 2 地点の差異とした語末の長音記号「一」は、下降を伴う語末母音長音化のうち、A 型の下降のための長音化であると思われる。この長音化は現在でも南串山方言によく保持されている。1 拍名詞で生起する最小語制約による長音化は、3 人において語の類に関係なく助詞付き文のほとんどでみられた。しかし単語単独ではみられなかったため、南串山方言における最小語制約による長音化は、文でのみ生起し単語では生起しないという偏りが特徴である。さらに、代償延長による長音化は、本調査では語頭以外の拍で/i/または/u/の母音が無声化、脱落あるいは縮約するなどして、拍の長さが減衰すると、それを補うために、その直前の母音が長音化するというもので、2・3 拍名詞の単語単独と助詞付き文の両方でみられた。</p> <p>結論として、南串山方言はアクセント体系では二型長崎タイプで、2 拍名詞の A 型には語頭が L か H かで地域差がある。また、3 種類の長音化のうち下降を伴う長音化はアクセントの実現に関与する。3 種類の長音化の生起の有無や優先順が話者によって異なり、言語現象には差異が生じる。結果として、南串山町という非常に狭い地域の中での著しい言語多様性の存在が明らかになった。</p>	

論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	野田 智子
題名	<p style="text-align: center;">The linguistic diversity of Minamikushiyama Dialect — In terms of the nominal accent and the lengthening of vowels —</p>		
<p>This study describes the linguistic diversity of the Minamikushiyama dialect at Unzen, Nagasaki , in terms of the nominal accent and the lengthening of vowels.</p> <p>This district has the history of forced migration from other clans after Shimabara - Amakusa revolt in the 17th century.</p> <p>Atago (1984) researched the differences of accents between two villages in the Minamikushiyama, and confirmed that one of the differences is having the lengthen of vowels or not.</p> <p>So I have done this study on the purpose of understanding the 3 subjects; the accent system of the Minamikushiyama dialect, the details of the lengthening Atago (1984) described, and other facts about the various linguistic differences in the Minamikushiyama dialect.</p> <p>Besides of Atago (1984), I referenced some previous studies about the accents and the lengthening of vowels in the Nagasaki (prefecture) dialect.</p> <p>This study based on the field works during about 2 years (2021-2022); it is collecting the record data of voices, about 10 speakers of the Minamikushiyama dialect. The spoken data are nouns of 1-3 morae, both of word only and sentence connected particle.</p> <p>By the analysis of the data, it was revealed that the accent system of the Minamikushiyama dialect is the Southwestern Kyushu dimorphic accent Nagasaki type. Its pitch pattern type A has the peak (the highest pitch position) on forward part of the phrase, and has a fall in the following mora. Type B has the peak on the last mora. Further there is the regional differences between 2 pitch patterns of the sentence of 2 morae nouns; HHL and LHL. The correspondence of the typological vocabulary to the dimorphisms is also in agreement with previous studies.</p> <p>Next, three types of lengthening in the Minamikushiyama dialect have been found; the word-final vowel lengthening with descent, the lengthening with minimal word restriction, and the lengthening with compensatory extension.</p> <p>The lengthening Atago (1984) described should be identified as the word-final vowel lengthening with descent. It is taken as the lengthening aimed descent for distinction of type A.</p> <p>The differences of rules using 3 types of the lengthening, make complexed linguistic phenomenon.</p>			

As the result, though the system of the accent is unified to dimorphic accent Nagasaki type, there is the conspicuous linguistic diversity in Minamikushiyama, in just small limited area.